

# 適性検査 I (三鷹型①)

注 意

- 1 問題は **1** のみで、**8** ページにわたって印刷してあります。
- 2 試験時間は**四十五分**です。
- 3 声を出して読むではいけません。
- 4 答えはすべて解答用紙に明確に記入し、**問題冊子と解答用紙を提出してください。**
- 5 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書いてください。
- 6 **受験番号**を解答用紙の決められたらんに記入してください。

## 1

次の「文章1」と「文章2」を読み、あとの問題に答えなさい。

(※印の付いている言葉には、本文のあとに「注」があります。)

## 「文章1」

中学の音楽の葛城先生は、元テノール歌手で、ドイツに住んでいたこともあり、白髪頭をオカッパにして、やたらと丁寧な言葉遣いでしゃべる。ヘンな先生だなあと思っていたら、ほんとにヘンなことを言い出した。再来週の実技テストを男女のペアで歌えってのはどうよ？ それも出席番号順とかじゃないのよ。

「せっかく男女で歌うのですから、お好きな方と約束するといいです。これぞと思う方に申し込みをしてください」

もう音楽室は悲鳴の嵐。

「ただし、男性は女性の申し込みを断ったらいけませんよ。三人に申し込み込まれたら三回歌うようにね」

「あぶれたヤツはどうなるんですか？」

こう聞いたのが、いかにもあぶれそうな柔道部の重量級の工藤寛だから笑えたけど。

「その場合は、あぶれた皆さんで大合唱しましょう。良いお点はあげられませんかね」

冗談！ あぶれ者の大合唱なんてそんなみつともないことさせられたら、次の日から顔をあげて廊下を歩けないよ。クラスで付き合っている彼氏がいたり、気安く一緒にやろうって声かけられる男子の友達がいればいいけどさ、いないもんね。そんな気のきいた子ばっかじゃ

ないんだよ。

その日から、話題と言えば音楽テストのことばかり。ウチらのグループは、彼氏持ちが一人いて、アヤは同じ体操部の吉田に声かけるって言ってたけど、サッチとリエと私はまるでアテがなし。

「加瀬くんのことについてちやおうかな」

ってリエがぼそつと言った。バスケット部の加瀬はよくモテる男で、クラス一の美女の磯貝をゲットして嫌味なほど完璧なペアを作っていたけど、他にも二人の女の子から申し込み込まれて※ハーレム状態になりつつある。

「ボランティアで工藤くんに行こうかな」

サッチもぼそりと言った。

「どっちがボランティアなんだよ」

と突っ込んでみたけど、二人とも自分から申し込み込むつもりらしくて、私はあせった。

「美緒はどうするの？」

いきなりサッチにずばりと聞かれて、私はうめいた。もし、自分から動かなければならないのなら、彼れかない——という人がいた。好きとかいうんじゃないけど、気になる子なんだ。軟式テニス部の三野田司。背が低くて痩せていて、地味なタイプだけど、声がキレイなんだよね、ボーイ・ソプラノで。一学期の歌のテストで、みんなが恥ずかしかったり緊張したりする中、キレイな声を張り上げて堂々と歌っていた。ほんとに楽しそうに。後から、「歌よかったよ」って声かけた

ら、急に恥ずかしそうな顔になって「よくないって。ガキの声で」って笑っていた。

どうしても男子とデュエットしないといけないなら、三野田がいいな。でも、あいつ、好きなコいるって噂なんだよね。私と同じ書道部の藤川さん。すらっとした物静かな美人で三野田よりだいぶ背が高い。よく見とれてるの、知ってるんだ。藤川さんはまだペアが決まっていみただから、三野田は思い切って申し込むかもしれない。邪魔でないよね。

なんだか急に三野田と藤川さんのことばかり気になってしまって、休み時間なんか、いつも二人がどこにいるか探して。ペアはほとんど決まっている。クラス一おとなしい小川香がクラス一うるさい金沢尚人に申し込んだり、山口宏樹がっいでに恋の告白もして林麻美とカップルになったり。リエは加瀬グループに参加。サッチはまだ工藤を捕まえていない。

部活で藤川さんと隣の机になった時、聞いてみた。音楽テストどうする？ って。

「私、あぶれると思う」

藤川さんは生真面目にそんなことを言う。

「私もー」

大声で同意すると、顔を見合わせて爆笑した。藤川さんて、こんなゲラゲラ笑う人なんだ。部活が一緒でもなんとなく近寄りたくてあんまり口きいたこともないんだけど。三野田のことをしゃべろうかな

って思ったけど、なんて言ったらいいのかわかんない。

「もったいない。ビジンさんなのに」

代わりにそんなことを言うと、

「美緒のほうがしゃべりやすいよ」

と藤川さんは言うのだ。

「私は、ダメだなあ」

「ダメなんて言うなあ！」

背中をドシンと叩くと、藤川さんは涼しい顔立ちでニッコリして、その目が少しだけ淋しくて、私はなんか胸がきゅんとした。三野田はきつと彼女のこんなところが好きなんだなって思ってた。

男子を待ち伏せするって意外とむずかしくて、三野田をやっと捕まえたのがトイレの前で、何？ って聞かれて、こんなところで言いたくないや。廊下のはしっこまで引張って行って、音楽テストのことを尋ねた。まだ決まっていなくて答えるので、思い切って言った。

「あのさあ、三野田さ、藤川さんに申し込みしてみない？ あの私もまだ決まっていなくて、自分から声かけたりできないみたいだし、もしよかったらさ……」

言いながら、すぐくへんなことをしてるって思った。おせっかいバアアみたいだよ。

「なんでよ？」

三野田は妙にクールな目をしてる。

「や、だから、三野田は藤川さんのこと……」

私は言いかけて絶句して赤面した。何をやっているのだ、おまえ——  
——広谷美緒。

「だから、なんで広谷がそんなこと俺に言いにくるのさ？」

昨日の部活の時に見た藤川さんの目が……なんて説明できないよ。困りきって黙っている、三野田は聞いてきた。

「で、広谷の相手は？」

私は両手でバツテンを作ってみせた。

「おまえ、人の世話、焼いてる場合？」

呆れた声で三野田に言われて、私は力なくハハハと笑った。恥ずかしくて死にたい。

「どうよ？ 俺」

三野田は自分の鼻を指差して尋ねた。

「広谷、俺と歌わね？」

「ええー？」

カ一杯叫んでしまい、三野田はショックを受けたように廊下の床にへたりこんだ。

「だって、私のこと好きじゃないでしょ？」

普通は聞けないような質問をぶつけると、

「これは、そういうことじゃないでしょ？」

真面目な顔で見上げて答える。私は自分を馬鹿だと思うのも忘れて、

三野田って意外と渋くてカッコイイと思った。

「広谷、前に俺の歌、誉めてくれたじゃん」

三野田は座ったままと言った。

「あれ、けっこう嬉しかった」

「うん」

「やろうよ」

「……うん」

ペアが成立してしまった。

（中略——結局、美緒は三野田と、藤川さんは工藤とペアで本番の合唱を終えた）

女の子二人のデュエットみたいだったね。下のパートなのに私より絶対に声の高い三野田ととにかくきれいにハモろうとして夢中になって歌ったんだ。目の前のクラスメートもピアノを弾いている先生もみんな忘れた。そこには、三野田と私の二つの声しかなかった。音楽室には屋上のような風がなく、二人の声は溶け合って豊かにふくらみ、大きく響いた。いいハーモニーだったと思うよ。とにかく、すごい拍手をもらった。びっくりしたよ。歓声が起きて、工藤が高らかに口笛を鳴らした。三野田は腕を突き上げてガッツポーズをした。やめてよ。テニスの試合じゃないんだから。私はそんなことできなかったよ。歌い終わってから、急に身体が動かなくなるほどガチガチに緊張したから。

先生が最終的には全員を組み合わせってしまったので、結局あぶれた

人はいなかった。ハッピーな人もつまんなかった人もいたと思う。私は——よくわからない。すごく恥ずかしい思いもしたし、すごく嬉し  
いこともあった。でも、一つだけ確かなのは、このメロディーが特別  
なものになったってこと。デュエットの歌声をきくと一生忘れないな。  
私と三野田の。藤川さんと工藤の。そして、クラスのみんなのそれぞ  
れのデュエット。

〔佐藤多佳子『第二音楽室』所収「デュエット」による〕

## 〔注〕

※ハーレム状態：一人の男性の周りにたくさん女性の女性がいる状態。

## 〔文章2〕

中学になって栽培委員会に入った「ぼく」（木下）は、ある雨の  
日、学校の花壇の花が心配になり、家からブルーシートを持ち出  
して学校へ向かい、花壇の屋根を作ろうとしたが、結局、先輩た  
ちや先生も協力して作業を行った。作業が終わり、走って家に帰っ  
ているときに、菊池さんに声をかけられた。

歩道を走るぼくの横を、ザザーツ、ザザーツと波のような音をたて  
て車が通りすぎていく。赤信号に立ち止まると、雨音に交じってさけ  
び声が聞こえた。

「木下さん！」

菊池さんが、畳んだ傘をふってかけてくる。ぼくのそばまで来ると、  
ハアハア息を切らして、傘を差しだした。

「忘れもの」

交差点に入ってくる車のライトが、菊池さんの顔を※ひっきりなし  
に照らします。

ぼくが傘を受けとると、菊池さんは口をとがらせた。

「なんであやまつたりするの？ わたしたちが勝手に手伝ったんだし、  
楽しんでたんだよ」

「え？」

「だいたい園芸に正解なんてあるの？ 本によってもちがうし、やっ

て失敗したら、それを次に生かせばいいんだよ。早川先生も言ったでしょ？」

「あ、グリーンカーテン……」

グリーンカーテンの植物を決めるとき、早川先生が去年の失敗を生かすと言っていたのを思い出した。

菊池さんが手でおでこをぬぐい、ぬれた横髪を耳にかける。

「ペチュニアとペンタスには悪いけど、もうしばらく、わたしたちの手探り園芸につき合ってもらおう。あの子たち、わたしたちのところに来たのもなにかの縁だと思ってくれるよ、きっと」

ぼくはふっと、ふきだした。

「都合のいい解釈だなあ」

菊池さんも、ふふっと笑った。

「最初は枯らしちゃいけないって責任を感じていたけど、わたしは当たって砕けることしかできないから、なんでも経験だっと思うことにしたの」

なんという前向き思考。すごいな、菊池さんって。

信号が青になり、菊池さんが手をあげた。

「じゃあね」

「あっ傘、ありがと」

ぼくが傘を持ちあげると、菊池さんの表情がふわっと、やわらかくなった。

「木下さん、顔出しているほうがいいね。なんか安心する」

ドキッと、胸が跳ねあがった。

そうだ、マスクをはずしたままだった。

鼓動がさざ波のように全身に伝わっていく。

学校に戻っていく菊池さんの後ろ姿を見ていたら、信号が点滅した。

「やばっ」

ぼくはふわふわした足取りで、横断歩道をかけ抜けた。

翌朝、ぼくは少し迷ったものの、マスクをつけるのはやめた。不安が強くなったらいつでもつけられるように、ジャージのズボンのポケットにつっこむ。

「いってきます」

「いってらっしゃーい！」

ハハの能天気な声に背中を押されて、ぼくは玄関を出た。

昨日、菊池さんに「いいね」なんて言われて舞いあがったけど、家に帰ってお風呂につかったら冷静になった。

菊池さんが言った「いいね」は、表情が見えるのはいいね、という意味だ。別にぼくの顔がいいとか、ぼくに好意を寄せているという意味じゃない。

ぼくだって女の子にかっこいいと思われたいという願望がないわけじゃないから、つい浮かれてしまったけど、まあ、そんな好意的なこと、この先も言われることはないだろう。

それでもマスクをはずして登校する気になったのは、菊池さんの言うとおり、表情が見えないのは、とっつきにくいだろうと思ったからだ。

マンガによくある、仲間と強い友情で結ばれるという世界に憧れていた。でも、どうしたら、そんな友だち関係が築けるのかわからなかった。自分には無理だと、あきらめていた。

マンガのようなことは、自分には起きない。ありえないことを期待するのはやめて、現実を見よう。空回りして人から冷たい目で見られるぐらいなら、傷つかない場所において、※当たりさわりのないつきあいをするのが一番いい。

—そう思っていた。

『本当にダメなときは自分のことで精一杯で、植物まで気が回らない……』

早川先生の言葉が、耳によみがえる。

あのとき、ぼくは小学生のころよりはマシになった気がしていた。でも、そうじゃなかった。やっぱり、いまでもぼくは、自分を守ることで精一杯だ。菊池さんみたいに、当たって碎ける勢いで友だち関係を築くのは、ぼくには難しい。けど、一歩だけ、自分の枠から外に出てみたいと思った。

植物栽培は、相手を知らなければ育めない。

たぶん友だち関係も同じだろう。相手を知らうとすること、心を開いて自分を知ってもらう努力をしないと、親しい関係なんて築けな

い……んじゃないかな。

エレベーターのドアが開くと、ぱあっと、明るい日射しに包まれた。深夜まで降っていた雨が上がり、雲の間から日が射している。

ぼくは、歩道の水たまりを避けながら歩いていった。

ドクン、ドクンと、心臓が音をたてる。

ポケットに手を入れてマスクに触れた。大丈夫、まだ行ける。

横断歩道を渡ると、フェンスの向こうにグラウンドが見えた。水色のジャージを着た生徒たちが、グラウンドにしゃがんでいる。体育委員が水たまりの泥水をぞうきんで吸いとっても、バケツにしぼっているようだ。

花壇はどうなっているだろう。

ぼくは鼓動が速くなるのを感じながら、正門に近づいた。ブルーシートに水たまりができているものの、花と葉はちゃんと上を向いている。

よかった。へたってない。

シートの上にたまっている雨水を流そうとブルーシートに手をかけると、パタパタとかけよってくる足音がした。

「水を流すの？」

工藤がとなり立って、ブルーシートをにぎった。

「ああ、ありがとう。頼む」

マスクをとったぼくの顔を見て、工藤が言った。

「花粉症おさまったの？」

「うん、まあ」

「よかったな」

やさしい声だった。これまで工藤からマスクについて聞かれたことはなかったけど、気にしてくれていたのかな、と思った。

ぼくたちは右側の花壇のブルーシートを持ちあげて、たまった水を流してからはずした。ほわあと、少し甘いような花の香りが広がる。

ああ、この花はこんな香りだったんだ……。

左側の花壇もやろうと移動すると、ふとまゆセンパイがやってきた。「よー、諸君。さわやかな朝だねえ」

当たり前のように、ぼくたちとブルーシートをはずす作業をする。

そして、工藤を手まねきした。

「工藤くん、見た？ ニチニチソウ46」

「は？」

首をかしげる工藤の肩に腕を回して、歩道の花壇に誘導する。

「ほら。この子たち、チョウが羽を広げて集まっているみたいだろう。

ひらひらした感じが、かわいいよなあ。しかも、かわいいだけでなく、

夏の高湿多湿たしつを耐えぬく、強さを秘めている。かわいさと強さをあわせ持つ、まさにトップアイドルだ」

ふとまゆセンパイは言いながら、満足げにうなずいた。

「なかでも、わたしの推しフラワーは、この子。ニチニチ美香だ」

ずらりと並ぶ花のうち、薄いピンク色の花を指す。

ぼくは、ぶっと、ふきだした。

工藤がとまどいがちに、うなづく。

「はあ、かわいいっすね」

「そうか、わかるか。キミは園芸の心を持つ逸材だ」

ふとまゆセンパイは、ぽんぽんと工藤の肩をたたいて、正門を歩いていった。

あー、すげーなー。

ふとまゆセンパイは、だれとも壁をつくらない。それに一見ふざけているようで、実はしっかり花の特徴を伝えている。ぼくみたいに委員※会カーस्टの下のほうだなんていじけることなく、栽培委員会の活動を堂々と宣伝しているようにも見えた。

工藤が細い目を見開いた。

「おもしろいセンパイだな」

ぼくは笑って、うなずいた。

「すげー人なんだよ」

笑いながら、ふと、心臓の音が落ちついていることに気がついた。

大丈夫だ……。マスクがなくても、平気だ！

ぼくは勢いづいて、工藤に言った。

「なあ、工藤。運動会の振替休日、映画に行かない？ 工藤が話して

た『陽炎前夜』が観たいんだけど……」

工藤がくしゃつと、人のよさそうな笑顔を見せた。

「おー、いいね。行こ行こっ。おれ、友だちと映画に行くのはじめて。

親か兄貴あにきとしか行ったことがないんだ」

「ぼくも、友だちと行くのははじめてだよ。楽しみだな」

しゅわーっと、はじけるものが胸のなかに広がった。

一歩ふみだせた手応えと安堵。こういうのを重ねていけば、友だちとのつながりが強くなっていくのかな。

(ささきあり『天地ダイアリー』による)

## 〔注〕

※ひっきりなし：絶え間なく続くさま。

※能天気：考えが浅くて、軽薄なこと。

※当たりさわりのない：他にかかわって影響を与えないこと。

※逸材：すぐれた才能を持った人。

※カースト：「ぼく」は学校の中の生徒が下層・中層・上層に分かれていると考えており、そのような身分制度的なものをカースト(本来はインドの身分制度のこと)にたとえている。

※安堵：物事がうまく行って安心すること。

〔問題1〕〔文章1〕に「もう音楽室は悲鳴の嵐。」とありますが、このようになった理由を、二つの観点からそれぞれ二十文字以上三十文字以内でわかりやすく説明しなさい。

〔問題2〕〔文章2〕に「マスクをはずしたままだった。」とありますが、ふだんから「ぼく」がマスクをしているのはなぜですか。その理由を説明しなさい。なお解答らんにおさまるよ

うに書くこと。

〔問題3〕〔文章2〕に「当たって碎ける勢いで友だち関係を築く」とありますが、このように人間関係を築くうえで、あなたはどうなことを大切にしたいと考えますか。〔文章1〕〔文章2〕の内容をふまえて、三百六十文字以上四百文字以内で説明しなさい。ただし、第一段落であなたが考える大切にしたいことを八十一文字以上百文字以内で書き、第二段落に、なぜそれが大切といえるのかの理由を書くこと。

## 〈きまり〉

- 題名は書きません。
- 最初の行から書き始めます。
- 〔問題1〕では、段落を設けず、一まずめから書きなさい。
- 〔問題3〕では段落を設け、一まずめを空けなさい。
- 、や。や」などもそれぞれ字数に数えます。これらの記号が行の先頭に来るときには、前の行の最後の字と同じまずめに書きます。
- 。と」が続く場合には、同じまずめに書きます。この場合、「で一字と数えます。